

### 子どもと保育の情景 (3)

## 子どもが「善悪」を感じるのときを、 その傍らに佇む人

戸田雅美

子どもをめぐる事件が起こるたびに、教育についてのさまざまな議論が起こる。その中に必ず「家庭の教育力が低下した」という論調のものがある。そして、そこで

の「家庭の教育力」とは、いわゆる「しつけ」のことであり、「小さいうちから善悪の区別をしっかりと教えていないからだ」ということになることが多い。これは、とてもシンプルな議論なので、いかにも正しく、当たり前前のごとくのように感じる。

しかし、子どもと保育の場に身をおいて考えていると、「悪いことは悪い」と「教える」という、このいかにもシンプルな議論が、それほど「当然のこと」とはいえないが見えてくる。そして、子どもの立場に立つたとき、議論が simple であることとは「簡単な、わか

りやすい」という意味ではなく、「単純な、ばか者(ばかな)」という意味になってしまわないかという危惧を覚えることがある。

二、三歳児の子どもを連れた母親が、あれこれと叱っている場面に出会うことがある。「静かにしなさい」「走ると他の人にぶつかるでしょう」「転んだら痛くて泣くでしょう」など。もちろん、公共の場では、静かであるのが「善い」し、あちこち走り回っていたりするのは、他の人の迷惑かもしれないし、本人にとっても、転んで痛い思いをして泣くことになるかもしれないから「悪い」ことかもしれない。母親は、子どもの一つひとつの行動が気になって、一生懸命に「善い」ことを「教えよう」と、叱っているように見える。

しかし、子どもは、目新しいものには好奇心旺盛だし、広い場所に行けば走りたいし、手ごろな高さのところを見つければ登りたくもなる。これは、この時期の子どもらしいきわめて自然な姿である。おそらく、そのことは母親も理解できているはずである。にもかかわらず、「悪い」ことは「悪い」と教えねばならないと、母親も必死になっっているように見え、私には、親と子どもに気の毒に思えてくる。

保育の場では、環境そのものが、子どもの自然が生かされるように整えられているため、走ったり、登ったり、にぎやかに歌ったとしても、叱られるようなことはなく、むしろ、肯定的に認められることが多い。だからといって、そこで子どもが「善い」ことと「悪い」ことを学ぶ機会が少ないということではない。

ある幼稚園の三歳児クラス、秋のことだった。

私は、急な泣き声に気づいて見ると、砂場のそばで、みこが、座りこんで泣いている。みこは、その朝、母親

の具合が悪いということ、父親と泣きながら登園してきた。やっと遊べて楽しそうにしていたのにどうしたのだろう。担任はあいにく他の子どもの怪我で手が離せない。そこで、私が、みこの話を聞くことになった。朝から泣いてきたみこが、私に話してくれるかしらと思いがらもそばに行ってみる。近づいて見ると、みこが頭のあたりを押さえて泣いている。「みこちゃん、頭痛くしたの？」と聞いてみた。すると、「しいちゃんが髪の毛ひっぱった」と言う。「ええ？ そうなんだ。それは、痛いよね！」私は、痛いというあたりを確認してみる。特に赤くなったりはしていないが、子どもの髪の毛は細く、ひっぱられるといかにも痛そうだと、心から同情し



た。私の言うことが心に留まったのか、泣き方は落ち着いてきた。そこで、「みこちゃん、しいちゃんに、何かしたの？」と聞くと、「何にもしてない」と再び泣く。

泣き声や、みこと私とのやりとりが気にかかつてか、四、五人の子どもが、近くで成り行きを見ている。その中に、しおり（しいちゃん）の顔を見つけた。しいちゃんも気になっていたのか…と思ひ、「しいちゃん、みこちゃんの髪の毛ひっぱっちゃたの？」と聞いてみると、あっさりと言ふ。みこもじつと、しおりの様子を見ている。私は、しおりは「悪い」と気づいているのかもしれないと考え、「みこちゃん、髪の毛ひっぱられて、とっても痛そうだよ」と言ふと、しおりはみこの様子を見る。私が「ねっ！ みこちゃん、痛そうでしょう？」と言ふと、またうなづく。

そこで、「みこちゃんに、ごめんね、する？」と聞くと「いや！ ごめんねしない！」と言ふ。そういえば、「しおりは、いつも、ごめんね、をしない」と担任が以前言っていたことをふっと思ひ出す。けれども、「もしかして、みこちゃんが、しいちゃんに、何かしたのか

な？」と聞いてみる。すると、しおりは「みこちゃんがお玉でぶった」と言ふ。見ると、確かにみこは、砂場で遊ぶときに使う遊具の玉杓子をさつきから手に持っている。「このお玉で、ぶたれたの？」と聞くと、しおりは、はつきりと頷く。

みこが手に持っているのは、サイズは小さいが、金属性の玉杓子である。「えっ？ みこちゃん、これで、しいちゃんのこと、ぶったの？」と今度は、みこに聞くと、みこは、玉杓子に目を落とし、今気づいた、という表情で「ぶっちゃた」と答える。私が驚いて「そうだったんだ。でも、このお玉でぶったら、とっても痛そうだよ！ どうして、ぶっちゃたの？」と聞くと、「こうきくんが、『前に、しいちゃんがたたいたから、しいちゃんのことたたいて』って言ったから」とのこと。そういえば、みこは、こうきとよく遊ぶ。今朝も、泣いていたみこの近くでおどけて見せて、思わず笑わせていたのはこうきだった。子どもには子どもなりの思いのつながりがあるのだと改めて思ひ当たる。

「でも、お玉でぶったら痛いよね」と言ふと、みこ

は、明るい声で「ごめんね」と謝る。しおりは、自分が髪の毛をひっぱったことはなかったことのように、屈託なく「いいよ」と答える。私が「みこちゃん、よかったね。しいちゃん『いいよ』だって」というと、唐突にしおりが、「ごめんね」と謝る。「いいよ」とみこ。私も、「しいちゃん、よかったね。みこちゃんも『いいよ』だって」言っていると、その繰り返しがおかしいというように、ふたりは、くくつと笑った。ずっと、成り行きを見ていた子どもたちも、おかしい！ というように、くくつと笑った。その中に一人ふらふらと落ちつかない様子にしている子がいた。こうきだった。その様子から、こうきはこうきなりに「悪い」ことをしてしまったとわかって、気まずそうにしているのだろうと思った。しかし、なぜか楽しい雰囲気になっているこの場では、かえって、「ごめんさい」とは言い出しにくそうだったし、そのいきさつを話そうとしても少し複雑で難しいのかもしれない。

そこで、私が「こうちゃん、嫌なことがあったとき、自分で言ったほうがいいね。こうちゃんが自分で言

わなかつたから、みこちゃんも、しいちゃんも、痛いことになっちゃったんだからね」というと、神妙な顔を二人にむけて頷いた後、すかさずおどけて、二人を笑わせた。結局こうきは、謝らずに終わってしまった。今日のところは、これでよかつたのだろうと思いつつも、この後は担任に考えてもらうことになった。

今振り返ってみると、私は、謝らせたいと思っただけではなかった。髪の毛をひっぱることも、金属のお玉でぶつことも、人に人をたたくように頼むことも、「善悪」という区別としては「悪い」ことになるのだろう。けれども、そのことを子どもが、なるほど納得することが、とても大事なことに思えて傍らにいた。人と人が暮らせば、いろいろな思いのすれ違いもある。そのすれ違いを解きほぐし、何がより「善い」とだったかと探る中に、「悪かった」あるいは「もつと善いことができたのに」と納得するプロセスがある。このプロセスこそが、とても simple には割り切れない、保育の営みのだろうと考えさせられた。

(東京家政大学)